

法華経と福音書の譬え話に関する考察

デンニス・ジラ

柳沼正広 訳

はじめに、ここフランスでの仏教経典展開催に尽力してくださったフランス創価文化協会と東京の東洋哲学研究所、そしてその協力者の方々に感謝申し上げます。また、法華経と福音書における譬え話の役割について、参加者の皆さまとともに考えるために、主催者は対話の精神に基づいて、私を招待してくださいました。このことに対しても感謝申し上げます。

この短い発表で私は、仏教とキリスト教の伝統においてすでに多くが語られてきた二つの譬え話に注目し

たいと思います。つまり法華経の「長者窮子」の譬喩とルカによる福音書の「放蕩息子」の譬喩⁽¹⁾です。ここで意図しているのは、両者の間の直接的な関係を証明することではありません。それは大変に危険なことでしょう。そうではなく、この二つの譬え話の類似点と相違点を示すことによって、何が自分の対話の相手と感動させているのかを知り、そのことを通して、私たちが皆、自らの伝統に立ち返って自己理解をさらに深めていくことを目指しているのです。

1 譬え話を用いる目的

この二つのテキストにおける譬え話の重要性を理解するために、この文学技法について、それぞれがどう述べているか見ていきましょう。まず法華経の第二章で、悟りを得た者はどのように教えるかについてブツダが述べている場面です。

仏は、舍利弗に言った。「このようなすぐれた法は、多くの仏・如来が、ある時にかぎって説く。それは優曇鉢うとんげの花が、非常に長い年月のあいだに、ただ一度だけ現れるようなものである。舍利弗よ、なんじらは、ただ信じるべきである。仏の説くところは虚妄ではない。舍利弗よ、多くの仏はそれぞれにふさわしいように法を説くが、その意図するところを理解するのは難しい。なぜなら、わたしは無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもって、多くの法を説いてきたからである。この法は、通常の思量・分別では理解することはできな

い。これを知るのはただ仏のみである。なぜなら、多くの仏・世尊は、ただ一つの大事な因縁のゆえに世に出現するからである。舍利弗よ、多くの仏・世尊は、ただ一つの大事な因縁のゆえに世に出現するとは、どういう意味か。それは、多くの仏・世尊は、衆生たちに仏の智慧を開かせ、清浄になることができるようにさせようと欲するゆえに、世に出現するということである」⁽²⁾

この「無数の方便と、種々の因縁と譬喩と言葉をもって、多くの法を説いてきた」との句は、法華経の中で何度も繰り返し返され、ほとんどの場合、ブツダがどれほど自身の教えを人々の性格や能力に合わせて説いているかを示しています。彼は、人々を「最高の完全な悟り（阿耨多羅三藐三菩提）⁽³⁾」に向かわせるためにこのように説くのです。また、ブツダが真実をすべて明らかにする第十六章（寿命品）を見ると、「多くの衆生たちには、種々の性質、種々の欲望、種々の行、種々の想念や分別があるゆえに」とあります。ブツダは「多く

の善根を生ぜしめようとして」⁽⁴⁾ 譬え話や他の巧みな手段を用いるのです。

マタイ、マルコ、ルカそれぞれによる福音書は⁽⁵⁾キリストが譬諭を用いる理由を説明していますが、ここではマタイとマルコから三つ引用するにとどめます。マタイでは、キリストはこの問題に次のように答えています。

だから、彼らにはたとえを用いて話すのだ。見ても見ず、聞いても聞かず、理解できないからである。イザヤの預言は、彼らによって実現した。「あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをやさない。」⁽⁶⁾

この少し後でマタイは次のように書いています。

イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった。それは、預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「わたしは口を開いてたとえを用い、天地創造の時から隠されていたことを告げる。」⁽⁷⁾

そして、マルコはキリストが「神の国」を教えるために語った一連の譬諭⁽⁸⁾を紹介した後で次のように書いています。

イエスは、人々の聞く力にに応じて、このように多くのたとえで御言葉⁽⁹⁾を語られた。たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

これらの引用の意味をよりよく把握するためには、表現できない真理を他者に伝えようとするときにプツ

ダとキリストが直面したジレンマを考慮しなければなりません。ブツダは、表現できないことを言い表すために、教えの中で涅槃、空、仏性、不二といった言葉を用いますが、究極的にはどれも十分なものではありません。維摩詰（ヴィマラキールテイ）の沈黙は「維摩の黙、雷のごとし」と言われていますが、このような沈黙のみが真理を響き渡らせるのです。仏教の智慧を象徴する文殊菩薩が「これこそ菩薩が不二にはいることであって、そこには文字もなく、ことばもなく、心がはたらくこともない」と述べたとき、この沈黙の正しさを認めていたのです。⁽¹⁰⁾

ブツダの沈黙については多くのことが書かれています。⁽¹¹⁾ 私たちにとって重要なことは、ブツダが教えを説くと決めたとき、彼が人々を究極的な実在に近づけるために用いた言葉とその実在そのものが同じであるとは人々に思わせなかつたことです。

これが、彼と彼の教えを聞く人々にとって譬喩が重要であった理由です。表現できないことを直接言い表そうとするよりも、自然や日常生活から引き出される

譬喩を用いるほうが⁽¹²⁾ 説法を聞こうとする人々をこの実在に対してより大きく開かせ、ついにはその中へ入らせるのです。私たちが知るかぎり、譬喩はおそらく、過剰なまでの言葉の豊かさによって、自身を超えたものの、自身の知らないもの、あるいは隠されているもの、人々が徐々に近づけるようにしてくれるものなのです。このことは、法華経の七つの譬喩⁽¹³⁾のどれにおいても、はつきり見られます。

キリストはといえば、彼はすべての人が神自身の命へと招かれていると説きました。しかし、神やその命について何を語ることができるというのでしょうか。キリストも沈黙についてよく知っていました。キリストが、他の者に沈黙を命じたあらゆる場面を思い起こしてください。最もわかりやすい例は、神が、自身の息子の栄光の片鱗を見せた⁽¹⁴⁾あの変容の直後の、弟子たちに対するキリストの命令です。「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」⁽¹⁵⁾

福音書における譬喩は、人々の聞く力に応じて、知

られざる真理のより深き理解へと、彼らがそれぞれの速さで進むことを助けたのです。たとえその真理が、天地創造の時から隠されていたこと¹⁶であつてもです。これらの譬喩を實際に聞くことによつて、人々は、彼の弟子¹⁶になりたいとさえ願えるようになり、弟子となつた人々は、キリストから、すべての説明を、ひそかに、受けられるまでになつたのです。しかしこの開放性が失われたとき、「耳は遠くなり、目は閉じてしまつた。こうして、彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、心で理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない」との預言者イザヤの言葉に該当する人々にとつては、同じ譬喩も、かえつて真理を曇らせるために用いられることになつてしまいました。こうして、ある人々が聞き入れて理解できる譬喩でも、他の人々には、とくにキリストに対して開かれていない部外者には謎¹⁶のままであるという事態になるわけです。要するに、ブッダとキリストが譬喩を用いたのは、なによりもそれぞれの枠組みの中で体験された、真理の深さ¹⁶と彼らが自覚した、それを語ることの困難さ¹⁶

との間にある隔たりのためであつたと言えるでしょう。また、自身がかんだ真理をすべての人に、それぞれの信仰の深さと内面の特性に合わせながら、何としても伝えようとした努力の表れともいえます。つまり、譬喩とは、その、過剰なまでの言葉の豊かさ¹⁶によつて、すべての人に、自分の現状を打破して内面を変革せよと呼びかけるものであり、そのような変革を経験するまでは想像すらできなかつたより深い真理へと開かせものなのです。

この変化なくしては、ブッダの道を進むことも、キリストの道を進むこともできません。これらの師に従うことを拒否した人の存在は、こうした変化はどれも受け入れることが難しいということを示しています。法華経の会座では、出家修行者と在家信徒の区別にかかわらず五千人もの男女が、最高の完全な悟り¹⁷を得る機会をすべての人に与えるという教えを聞くことを拒んで退席しました。またキリストにも、彼の譬喩話を聞きながら、彼に背を向けただけの人が多くいました。

No Image

「長者窮子の譬喩」を描いた敦煌莫高窟の壁画（98窟・南壁、10世紀）。物語の3場面を描く。絵の上部右は、困窮した息子（一番上の人物）が、大きな屋敷で人々にかしずかれる長者（中央）を見て、おそれをなすシーン。絵の下部では、雇われた息子が馬小屋の掃除をしている。絵の上部左は、立っている長者が部屋の中に座る国王や、親族らに眞実を告げ、息子に全財産を譲ると語る場面（敦煌研究院提供。「敦煌石窟全集7」上海人民出版社）

2 「長者窮子の譬喩」と「放蕩息子の譬喩」

さて後半は、法華経に見られる長者窮子の譬喩とルカによる福音書に見られる放蕩息子の譬喩の話の要点をお話することから始めたいと思います。法華経の第四章において、四人の阿羅漢⁽¹⁸⁾が、彼ら自身も最高の完全な悟りを得ることができると理解した後で⁽¹⁹⁾、譬喩を用いて自分たちの実感を釈尊に伝えます。彼らが語ったのは、ごく若いころ父親のもとから逃げ去り、他国で長く暮らすうちに窮乏に陥った男の物語です。

その男は、ある日、仕事を求めて、すでに大変に裕福になっていた父親の暮らす地にやってきました。男は、父親を見ても父親であることがわからず、このような裕福な人間は自分には仕事を与えてくれないだろうと思って逃げ出します。しかし、父親のほうは、男が息子であることがわかり、使いをやって彼を連れ戻します。ところが、息子は驚きのあまり気を失ってしまいます。父親は、自身の豪華な生活ぶりが息子を恐れさせたことを理解し、息子を自由にするように命じ

ました。召使たちが指示通りにすると、息子は喜んで自分が暮らしていけそうな貧しい村に向かいました。

父親は息子の関心を引くために、うまく変装させた召使たちを送り、一緒に働くように息子を誘わせました。その仕事が卑しいものだったので、息子は受け入れませんでした。息子が働く姿を見て父親は憐れみ、自ら粗末な服を着て道具を手にし、働き手の中に混じりました。このようにして父親は、恐れさせずに息子に近づくことができました。時が過ぎるにしたがって、父親は息子にだんだんとより重要な仕事を任せるようになります、本当の息子のように思っていると告げます。年月とともに、信頼関係が築かれていったのです。

父親は病気になる、息子に彼自身の財産の管理も任せたいと言います。息子は同意しますが、まだ自分が卑しい身分であると思いついています。父親と息子の関係は、さらに緊密になってゆき、とうとう父親は死の床で、人々を集め真実をすべて明らかにします。この時、息子の心は準備が整っていました。求めることさえなかった無量の宝が自分のものとなったことに驚

きながらも、この予期せぬ真実を大きな喜びをもって受け入れたのです。

ルカによる福音書の中で、イエスによって語られる放蕩息子の譬喩は、当時有力な宗教勢力であったファリサイ派や律法学者から蔑まれていた徴税人や罪びとたちを、神がどのように見ているかを教えるために説かれました。⁽²⁰⁾ 譬喩話は、二人の息子をもつ父親が、若い方の息子に財産の分け前を求められ、譲渡するところから始まります。その若い方の息子は、遠い地へ去り、その財産を放蕩の限りを尽くしてすべて費やしてしまいます。飢饉のために彼の状況はさらに悪化し、やむなく豚の世話をするようになりますが、豚のほうが彼よりも良いものを食べているほどでした。

彼は、我に返って、雇われていた人々も十分に食べることができていた自分の家を思い出します。父に対しても天に対しても罪を犯してしまったことを自覚した彼は、帰って許しを乞おうと決意します。彼は、自分には何も求める資格はないことを知っていました。父親は、遠くから息子の姿を認めると、憐れみを覚え

て駆け寄ります。許しを求める息子の言葉も聞かずに、父親は召使たちに命じて、彼に最も美しい服を着せてやり、手には指輪をはめてやり、祝宴まで開いてやりました。

年上の息子が畑から戻って、このことを知ると怒り始めました。彼は訴えました。自分は一度も父親に背いたことはなかったのに、父親は自分に、友人たちと宴会をするための子山羊一匹すら与えてくれたことはなかったと。譬え話は、父親が年上の息子に家に入る

No Image

レンブラント作「放蕩息子の帰還」の一部（1668年頃、262×206cm、エルミタージュ美術館蔵）

ように説得する場面で終わります。「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」²¹。これに対する年上の息子の返答は知られていません。

3 類似点と相違点

二つの譬え話の明らかな類似点は、家を出て長い間流浪して困窮に陥る息子と、息子を探す憐れみ深い父親が登場することです。しかし相違点は非常に多く、さらに重要です。というのも、それらは仏教がどれほど根本的にキリスト教と異なるかを教えてくれるからです。そしてこれこそ、対話において、これらの相違点を認識し思索をめぐらすことが不可欠である理由です。またこれらは、ブツダの慈悲と神の万人への愛の大きさは、人間がたとえどんな欠点を抱え、どれほど失敗を重ねても、まったく変わらなないということ、より深く理解させてくれるでしょう。

まず相違点の中で、これらの譬え話が語られる、枠組みに注意を向けましょう。法華経においては、靈鷲山に集まった数多くの菩薩や阿羅漢、神々や様々な他の存在者の面前で、ブツダに対して阿羅漢のグループによって語られます。伝承によればブツダはこの靈鷲山で多くの重要な説教を行っており、そのことが法華経に重みを与えています。一方、ルカによる福音書では、社会の中で蔑まれている人々も参加できた食事の席で、ごくわずかな人々に対してキリスト自身が語っています。このように食事の席を共にすることは、フアリサイ派と律法学者たちを当惑させ、彼らはキリストを非難することをやめませんでした。

息子が再び父と一つになる仕方もまた大いに異なっています。法華経においては、長者の息子はそれとは知らずに父の住む都市にたどり着きますが、ルカによる福音書では、息子は悲惨な状況に陥った中で、許しを求めするために家に戻ることを決断します。この願いは生存本能によって引き起こされたものではありませんが、彼の誠実さはすぐに明らかになります。

息子を見出した時の父親の憐れみの表現も異なりま
す。法華経においては、父親は息子に近づきたいと願
いますが、息子にまだその準備ができていないことを
理解して自制します。福音書においては、父はまだ遠
くにいる息子を見つけると駆け寄って抱きしめ、家族
の象徴を身につけさせ、帰還を祝う特別な宴を開きま
す。すべてのことが急速に起こります。

この速さはもう一つの重要な相違点の核心部分でも
あります。福音書で父と子の関係が直ちに回復される
のは、愛の力はすべてを克服するからです。心を改め
ることや許しを乞い願うことは息子には必要であつた
にしても、何ごともなかったかのように息子を歓迎す
る父親にはそのようなことは必要ないことが、すぐに
明らかになるのです。

父親の息子に対する愛についてはこの譬え話は雄弁
ですが、いくつか問題が残ります。若い方の息子は内
心ではこの和解をどのように感じていたのか。この圧
倒的な歓迎を受け入れる用意が、このような短時間の
うちにできていたのか。この譬え話はこのような問い

には答えてくれませんし、その後の父と息子の関係についても何も語っていません。大切な点は、父なる神の愛は完全に無償であるように思われることです。

法華経の譬え話は、本当の自分についてごく限られた自覚しかもっていない息子を、自身の根本的な性質に対する完全な自覚へと導く父親の、つまりブツダの能力を描いています。こうしたことにはすべて長い時間と多くの忍耐が必要です。ここに真に驚嘆すべきブツダの教えがその姿を見せています。すべてが、諸仏の最高の智慧を語るとともに、法華経の核心に、そして法華経を信じる人々の経験の核心部分に息づくブツダの慈悲を語っています。ですから、この慈悲が、一連の譬え話の中心にあるのも当然のことでしょう。

それらは結局、様々な仕方によって、声聞乗と縁覚乗と菩薩乗がそれぞれに対する教えと同様に仮のものにすぎないということを示明しているのです。救済の方便という観点から見れば、これらの譬喩が巧みに用いられるとき、衆生は、彼ら自身が想定している、限られた悟り[〃]を超えた尊い、最高の完全な悟り[〃]を得

るための唯一の教え、すなわち一仏乗に導かれることになるのです。

真に偉大なブツダの慈悲は、衆生がこの最高の悟りに至るのを助けるところにあります。これがまさに私をはじめに言及した、ただ一つの大事な因縁[〃]であり、ブツダがこの世に出現したのは、すべての衆生にブツダの智慧（仏知見）の扉を開き、ブツダの智慧を悟らせ、清浄になれるようにするためだったのです。⁽²³⁾

最後の重要な相違点は、放蕩息子の譬喩に登場する年上の息子の存在です。彼をこの譬え話の主人公であるとみなす聖書学者もいます。⁽²⁴⁾ 事実、父親の促しに対する彼の答えがないということが、読者・聴衆に自身自身の答えを出すように求めているのです！ 父親に、つまり神の愛に応答するかどうかは読者・聴衆に委ねられているわけです。弟を許さず父親に応答しないことは、この譬喩が向けられていたファリサイ派と律法学者たちが罪びとへの神の愛を信じなかったことに対応するでしょう。ここに、現代でもこの譬え話が生きている理由があります。この譬え話は、それを読んだ

り聴いたりする人に対して、人類への神の絶大な愛を受け入れるようにいざない続けているのです。

むすび

以上のような考察は、対話の精神によって生まれてきたものです。ですから、私は結びとして、仏教徒とキリスト教徒がこれらのテキストを知的に読むときに広がる対話の領域をいくつか示したいと思います。

第一の領域は、人間の置かれた状況に関するものです。両方の譬え話は、人類に行きわたっている不満と脆さを示しています。その不満とは、自分が本当は何者であるかはつきりしないということです。二つの譬喩の息子たち同様、私たちに不幸にも真実の根から自分自身を切り離す能力には長けていて、その耐え難い報いを受けています。これらのテキストについて熟考する人は、両者に共通するこうした状況について多くを語ることはできません。

第二の領域は、誰もが本当の自分を見出すことができる可能性に関するものです。どちらの譬え話も、人

間は生まれながらにして不満足な状況にとらわれた囚人である」とは語っていません。それどころか、それぞれの仕方で、そこから抜け出る方途を示してくれています。この希望は、ときに破壊的なまでの精神疲労の様相を示す現代の世界にあって、法華経に啓発された人々と福音書に啓発された人々が平和に向かつて共に働くことを可能にしてくれるでしょう。

第三の、そしてとても重要な対話の領域は、この満たされない状況から人類が抜け出す方途に関わるものです。この領域は、神の絶大な愛を贈り物として、つまり恩寵として語る放蕩息子の譬喩と、本来の自分自身についての完全な自覚へと向かう緩やかな進歩に焦点を当てていると思われる法華経の譬喩を比べると、大変に狭いものと思われてしまうかもしれません。しかし、この領域は、法華経に繰り返し現れる「自然に」「自ずから」という言葉に光を当てるとき、確実に広がっていくのです。

この点において、法華経の譬え話の最後で、自分が何者であるか」を父から知らされ、無量の宝を得た息

子の心境は大変に興味深いものです。「わたしには、はじめから求めようという心もなかった。今、この宝の蔵のほう(25)が自然にやってきた」。この譬え話を説いた阿羅漢たちの説明でも同じ言葉が使われています。「わたしたちは、今日、これまでになかったことを得ました。わたしたちは、以前に望んだこともありませんでした(26)が、自ずから得るところとなりました」。自ずからと「恩寵」が同じであるなどと想像しようというのではありません。ただ「自ずから」と「恩寵」の核心部分にある、悟りや救済を得るには何をすべきか計算などしなかったことの重要性(26)について熟考してみたのです。

対話には、これから見出すべき興味深い領域が他にもたくさんありますが、残念ながらここで終わらなければなりません。しかしながら、話を終える前に、もうひとつ別の問いに答えなければなりません。それは、対話のこれらの領域の中で、私たちはどのように振舞えばよいのかという問いです。答えは簡単です！それはちよつと水泳に似ています。対話の仕方を学ぶに

は……対話をすればよいのです！そして、行き詰まったときには、こう思い出しさえすればよいのです。対話しているとき、私たちは孤独ではないと。

ご清聴ありがとうございました。

注

- (1) それぞれの譬え話は、法華経の第4章「信解品」、「ルカによる福音書」の第15章に見られる。
- (2) 『妙法蓮華経並開結』、創価学会、2002年、119-121頁。三枝充恵訳『法華経 現代語訳(全)』第三文明社、1978年、61-62頁。(訳注) 三枝訳を大幅に改変した。
- (3) 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、208頁/477頁。三枝訳(前掲)、142/369頁。
- (4) 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、482頁。三枝訳(前掲)、372頁。(訳注) 三枝訳を大幅に改変した。
- (5) (訳注) 福音書からの引用は「聖書 新共同訳」日本聖書協会、1987年による。
- (6) 「マタイによる福音書」13:13-15。
- (7) 同、13:34-35。
- (8) 「種を蒔く人」「ともし火と秤」「成長する種」「からし種」の譬え。

(9) 「マルコによる福音書」 4 : 33 - 34。

(10) この問題においては維摩詰の雷の如き沈黙に言及しなければならぬ。仏教の世界で有名なこの霊的対決は維摩経に説かれる不二をめぐる問答の中に見られる。多くの菩薩（悟りを得ることを誓った者）たちが不二についての自身の見解を述べた後、文殊菩薩が自身の見解を披露する。「高貴な人よ、あなたがたの説はすべてよろしいが、しかし、あなたがたの説いたところは、それもまたすべて二なのである。なんらのことばも説かず、無語、無言、無説、無表示であり、説かないということも言わない、これが不二にはいることです」。続いて文殊菩薩が維摩詰に見解を求めると、維摩詰は何も言わなかった。すると文殊菩薩は維摩詰をたたえて言った。「大いに結構です。良家の子よ、これこそ菩薩が不二にはいることであって、そこには文字もなく、ことばもなく、心がはたらくこともない」。

(11) (訳注) 邦訳に際しては長尾雅人・丹沼昭義訳「大乘仏典7 維摩経・首楞嚴三昧経」中央公論新社、2002年、138頁を参照した。

(12) 例えば以下の文献がある。*Le silence du Bouddha : et autres questions indiennes* (The Silence of the Buddha and other Indian issues), Roger-Pol Droit, Hermann Éditeurs, 2010.

(13) 譬え話の機能の分析については以下の文献を参照。Les paraboles du Royaume: Jésus et le rôle des paraboles dans

la tradition synoptique (Parables of the Kingdom: Jesus and the Use of Parables in the Synoptic Tradition), M.A. Getty-Sullivan, dans la collection « Lire la Bible », Éditions du Cerf, 2010, p. 9-32.

(14) 七つの譬喩とは、三車火宅の譬喩、長者窮子の譬喩、三草二木の譬喩、化城宝処の譬喩、衣裏繫珠の譬喩、譬中明珠の譬喩、良医病子の譬喩である。

(15) (訳注) イエスが、弟子ベトロ、ヨハネ、ヤコブを連れて高い山に登り、そこでモーセとエリヤと語り合いながら、白く輝く姿を弟子たちに示した。「主イエスの変容」と呼ばれる。マタイによる福音書17章、マルコによる福音書9章、ルカによる福音書9章に説かれる。

(16) 「マタイによる福音書」 17 : 9。

(17) 謎としての譬え話については、前掲（注12）文献の52頁を参照。

(18) (訳注) 第2章・方便品に説かれる「五千起去（五千上慢）」のエピソード。

(19) 阿羅漢とは、初期、仏教の枠組みの中で、悟りを得るための修行をすべて終えた者を指し、尊敬を受けるに値する者、という意味。

(20) 四人の阿羅漢、須菩提、摩訶迦梅延、摩訶迦葉、摩訶目犍連は、法華経第3章で説かれた三車火宅の譬喩を聞き、自分たちにも最高の完全な悟りを得る可能性があるというブツダの教えを理解した。

- (20) Claude Tassin, Jacques Hervieux, Hugues Cousin and Alain Marchadour, *Les Évangiles : textes et commentaires* (The Gospels: Texts and Commentaries), Bayard Compact, 2001, p. 733.
- (21) 「ルカによる福音書」15…31-32。
- (22) 小乗、大乘、金剛乗と混同してはならない。
- (23) 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、120-121頁。三枝訳(前掲)、61-62頁。
- (24) 前掲(注20) 文献、734頁。
- (25) 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、221頁。
- (26) 『妙法蓮華経並開結』(前掲)、235頁。

Dennis Gira / パリ・カトリック学院元教授。1943年、シカゴ出身。1969年から1977年までの8年を日本で過ごし、日本語や日本文化、日本の宗教とくに仏教について学んだ。1977年、家族とともにフランスへ渡り、研究を続け、パリ第7大学から東アジア学の博士号(1981年)と、高等研究実践学院(Ecole pratique des hautes études) からディプロマ(1982年)を取得。1988年から2007年まで、パリ・カトリック学院にある科学と神学研究所の副所長を務めた。退職後も、フランスのカトリック系大学(リヨン、パリ、アンジエ)や国内のセミナーで、仏教や宗教間対話に関する講座を引き続き行っている。同テーマを扱った出版書籍は多数ある。邦訳『ブツダかキリストか』(サンパウロ社、2005年)も発刊されている。

(訳・やぎぬま まさひろ / 東洋哲学研究所研究員)